

# 白亜の王子 ——カイの冒険物語正伝——

久保はてな

今となっては遠い遠い太古の話、白亜の城にカイという名の王子が暮らしていた……

## 1

緑の草原がなだらかな丘陵に広がる。遠くの畑で人々が働いている。向こうには白い壁の古城。雲雀の声が春を告げていた。

雲一つない抜けるような青空の下で、巨大な鳥が二羽空中を飛び交っている。いや、あれは鳥ではない。鳥の形をした飛翼機。王家に連なる者にしか乗ることを許されぬ聖なる飛翼機だ。

まだ幼さの残る顔立ちの少年が二人、狩猟服を身につけ翼の背に跨(またが)っている。

白い肌の少年は王子カイ。今年十五を迎えた。褐色の肌の少年は王子の乳母子トーラス。彼らはまるで地上を疾駆する竜のように飛翼機を操っていた。

今しも二機はうなりを上げて離れ、再びブーメランのように旋回して低空ですれ違う。せつな一方の飛翼機からカイが蹴落とされた。

トーラスが空中で小気味よく笑う。カイはくやしそうに空を見上げた。蒼く澄んだ瞳に飛翼機が映る。

そこへ駆竜(くりゅう)を走らせて乳母のトロテがやって来た。

「カイ様、長老が呼びですよ！」

トロテはカイに呼びかけると、竜から下り、空の少年に拳を突き上げた。

「こら！ トーラス、降りてらっしゃい。また王子様を痛い目に遭わせて。今度という今度は許さないからね」

しかし、トーラスは「あっかんべー」をすると、「先に行ってるぞー」の声を残してレイヴァン城へすっ飛んで行った。

トロテはなお罵った後、カイに近寄り介抱しようとする。

「大丈夫。これくらいのことで怪我なんかしないさ」

カイはそう言って立ち上がると、トロテの手を振り払うようにして飛翼機に飛び乗る。機はぐいと浮き上がり、猛スピードでお城に向かった。……

「おじいさま、呼びですか」

そこはレイヴァン城の最上部、小さな部屋に祭壇がしつらえられている。祭壇背後の壁には真っ赤な太陽と白い鳥の模様が描かれ、祭壇に同じく鳥の形をした黄金製の神の像が祀られていた。像は小さく片手の大きさもない。

部族最長老のカイエスは早六十の坂を越え、白髪と白髭に覆われていた。

「カイよ。いよいよ神の声が下った。神は使者としてお前をご指名になられた」

連日長(おさ)たちが最高会議を繰り返していたことは民や衛兵が話題にしていた。その内容が何か切羽詰まったものであることも漏れ聞こえていた。

しかし、自分にとっては突然の話なのでカイは驚いた。つい先頃成人式を済ませ、飛翼機もやっと乗りこなせるようになった程度だ。

「これから語ることはお前にとってにわかに信じられぬことかもしれぬ。実はむしろ長も半信半疑なんじゃ。だが、最近の天候異変と合わせても神のお告げに嘘はあるまい。

お前にはまだ早い、王家に連なる者として神の前で我らに迫り来る危機を明かそうと思う。ついて参れ」

カイエスは祭壇の黄金の鳥像(ゴールドバード)を手にとると、後ろの壁に向かって像を突き出した。すると壁が半分の高さの所ですっと左右に開く。その先はさらに小さな部屋だった。カイの初めて見る部屋だ。中には何もない。

二人が部屋に入るとカイエスは壁の取っ手を右に回した。突然部屋全体に振動が走り、カイは空中に浮き上がるような感覚に襲われ、危うく倒れそうになった。

振動と奇妙な摩擦音に暫く包まれた後、足が重くなって振動は止んだ。反対側の扉が左右に開く。

一步踏み出すと、そこはがらんどうの巨大空間だった。カイには何が何だかわけがわからなかった。このお城のどこにこんな巨大な部屋があったのか。しかも、薄暗い部屋を見回せば、壁全体が剣の刃に似て金属質の光沢を放っている。

カイエスはさっさと歩き出す。カイも後を追った。どこからかひんやりとした風が流れてくる。暫く歩いた後、目の前に姿を現したのは巨大な建造物だった。

「これが……神じゃ」カイエスは言った。

カイは神の姿を見上げた。高さが城の半分はありそうな巨大建造物。全体が黄金色に輝き、一つ一つの固まりに微かな明かりが明滅している。青く、赤くその光は瞬く。

「これが……神なのですか」

にわかには信じがたい。人の姿ではなかったのか。

「そうじゃ。お前もいずれ神の声を聞くときが来よう。しかし、今それを許されておるのはわしだけじゃ。よってわしが神の声を伝える。

実はこのアトランの島……いやこの星の全てが今や滅亡の危機に瀕しておる。それが神のお告げじゃ」

「滅亡の危機？」

「そうじゃ。この星は理由はわからぬが極地の氷河が溶け始めておる。なおかつ巨大隕石がこの星に迫っている。神は隕石が約一年後サウス氷河に墜ちると予言した。衝突による黒煙は星を覆い尽くし、極寒の冬が数十年も続くじゃろう。生物は全て死に絶える。

しかし、その前に破壊されたサウス氷河が海面を百ハーン（百メートル）上昇させるとのことじゃ。我がアトランは海底に沈む……」

ウッソーと言いたいのをカイは辛うじてこらえた。そんなことがこのアトランで、この穏やかな地で本当に起こるのだろうか。民に話しても誰も信じないだろう。「巨大な石が降ってくるって？ 空を見てみろ。どこにそんな石が浮かんでる？ それはどうやって空に登るんだ？」などと言うに決まっている。信じる者は一人もいないに違いない。しかし、この神の姿を見、そのお告げを聞けば、あるいは信じてくれるかもしれない……。

カイエスは続けた。「王家に連なるお前だけには話しておく。実はこのアトランの島はスター・トゥルースと言う名の巨大な飛翼機じゃ。星々の間を自由自在に飛ぶ乗り物なんじゃ。

ここは城の地下五〇ハーンの土の中。我々の祖先は今より六百年前この星にやって来た。祖先は百年間スター・トゥルースの上に土を運び、山や湖を作り、植物や木々を植えた。そして、今から五百年前祖先は船を出た。以後畑を耕し穀物や野菜を作り、原始文明をスタートさせ、漸くこの星に住み着くことができたのじゃ」

カイにとって祖父の話、つまり神の声は驚きの連続ばかりだった。祖先の苦労は歴史で学んでいたが、まさか空の果てからやって来たとは思ひもしなかった。

カイは疑問を口にした。「しかし、海を越えた異境の地には居住可能な他の大陸があると聞きます。なぜ、そこに住まなかったのですか。これから行くことはできないのですか」

「それができぬのじゃ。この星の重力は今ではもう消滅した我が母星の十倍はある。このスター・トゥルースが適度な反重力地場を作り出しておるから、われわれは立っていることができる。アトラン以外の地に行けば、われらは地面に這いつくばって暮らさねばならぬ」

「そうですか……」

「もはや猶予はない。アトラン島をスター・トゥルースとして再始動させねばならぬ」

「六百年も経ってこの船は動きますか」

「わからぬ。しかし、神は動くと言っておる。わが祖先は不朽の金属でこのスター・トゥルースを建造したらしい。だが、問題はこの船を起動させる鍵じゃ」

カイエスは巨大建造物の一隅、机のような所にカイを連れていった。机上には大小のボタンとともに、はめ込み式の穴が五つあった。カイエスは手にした黄金の鳥像(ゴールドバード)をその一つに填めた。かすかに震えるよううなりが起こり、すぐにやんだ。

「五つの穴全てに鍵をはめ込まねば、スター・トゥルースは動かぬ。残りは四つ。それはここにはない。

今から五百年前我々は船を出て五部族に分かれた。そのときそれぞれの部族は守り神としてゴールドバードを持っていった。祖先はまさかこの船を再び動かす時が来るなど考えもしなかったのじゃろう。

だが、泣き言を言っても始まらぬ。残り四つの黄金の鍵は他部族の長が持って

おる。各部族はそれを守り神として大切に祀っているはずじゃ。果たして事情を説明してもたやすく渡してくれるかどうか。

「我が住むこの地は聖なる地ということで鎖国状態じゃ。ゆえに、それら部族と交流がないまま現在まで来てしまった。あるいは、もう各部族の性質は変わっておるやも知れぬ」

「しかし、おじいさま。私はこの神の姿を拝見し、不思議を目の当たりにしたので、おじいさまのお話を信じることができました。私が他部族の説得に出向くとして、一体どうやってこの話をその人たちに信じさせるのですか。信じてくれるでしょうか。いや、それより各部族の長老を呼び、この場所で事情を説明した方が早いではありませんか」

「それはできぬ。このスター・トゥルースを操縦できるのはわしら部族の王家だけじゃ。だが、証拠は見せる。このゴールドバードじゃ。お前はこれを持って行け。それは神の指示でもある。他部族の古き教えに『黄金の鳥の像を持ちたる者、神の使者として崇め奉るべし』とあるはず。ただもはや五百年が経過した。果たして効くかどうか。もしも鍵が集まらなければ、我がアトランは海の底に沈む…」

それから二人は城最上部の祭壇の間に戻った。

カイは上昇の部屋でなぜ自分が選ばれたか考えていた。王家の嗣子としてゴールドバードを持てるのは自分しかないからか。だが、自分にそんな重要な任務がつとまるだろうか。それにもう一つ聞きたいことがあった。鍵が五ヶ集まったとして一体何人の人間がスター・トゥルースに乗れるのだろうか。それは聞くのが怖いような質問でもあった。

祭壇の間でカイエスはアトランの地図を広げた。海の中にぽっかり浮かぶ島。カイには全体がどの程度の大きさなのか見当もつかなかった。

「中央が我がレイヴァン城、鳥族の聖地じゃ。北に獣族、東が虫族。虫族は獣族の傘下と言っていい。最も野蛮で攻撃的なのはその獣族じゃ。そして、西の湿地帯は水族のエリア。これは友好的なので言うことを信じてくれるじゃろう。南の雷が荒れ狂う地が……」

そのときカイエスは言いよどんだ。

「南は何です？ もっと強敵なのですか」とカイ。

「いや、南は雷族の地。これも攻撃的じゃが説得次第かもしれぬ」

「そうですか」

「それぞれの境界線辺りには宿場町がある。交易も行われているはずじゃ。お前は初めて訪れることになる。アウトローとのいざこざや妙な誘惑が多いやもしれぬ。任務を忘れるでないぞ」

そう言ってカイエスはカイにゴールドバードとアトランの地図を手渡した。

「頼んだぞ、カイ」

鳥の像は小さいのにずっしり重い。カイは地図を油紙に包み、二つを皮のずた袋に入れて腰に下げた。

「わかりました。何とかやってみます。時間はどれくらいあるのですか」

「一年あるかどうか。ただ幸いなことは飛翼機が使える。他部族は持っておらぬからの。移動はかなり早くできるはずじゃ」

「トーラスを連れて行ってもよろしいでしょうか」

「うむ。トーラスは役に立とう。連れていくが良い」

「ではおじいさま。お体を大切に」

「頼んだぞ」

カイエスは隣室に向かい、カイは見送った。するとカイエスはドアの取っ手に手をかけ、やや躊躇した後向こう向きのまま口を開いた。

「カイ……お前は自分をずっと一人っ子だと思っておったろう。そして、父も母もお前が子どもの頃に亡くなったと聞いたはずじゃ。しかし、本当は父も母も生きておる。それに兄と妹が一人ずついるはずじゃ。四人はお前を残してこの地を去った。今頃どこでどうしているやら。あるいは離ればなれになったか。いずれにせよ、どこかで巡り会うやもしれぬ……」

カイの顔から血の気が引いた。初めて聞く話だ。しかし、カイエスはカイの質問を封じるかのように、そのまま部屋を出て行った。

## 2

カイエスが部屋を出た後も、カイはなおしばらく呆然と突っ立っていた。そして、ふらつく足に力を込めて歩き出した。トーラスのところへ行くつもりだった。飛翼機でカイを負かしたので、今頃は上機嫌で昼寝でもしているに違いない。

カイエスから聞いた話をしたら、トーラスは何と言うだろう。信じてくれないのではないか。「おまえ何言ってるんだよ。じーさんにからかわれたんじゃないか」とか何とか言って馬鹿にするに決まっている。あいつはそーいう奴だ。

それでもトーラスは「ったく、王家ってのはいろいろご面倒なもんだな」と言いながら、旅に同行してくれるだろう。

腰の革袋に入れたゴールドバードが重い。なぜ神は自分を指名したのか。何かなんだか分からない。王家の王子と言っても自分はまだ何一つまともにできない。飛翼機の扱いもトーラスの方がよっぽど上手い。自分なんかよりよほど神に選ばれるのにふさわしいと思う。

自己嫌悪を感じつつカイは階段を下った。山のような城の下の方の階に、トーラスは家族と住んでいる。

そのときカイはあたりの空気に違和感を覚えた。巨大な城内にこもった空気がほんの少し熱く、鼻を燻(いぶ)すような臭い……。

「火事だっ！」

カイは一直線に階段を駆け下りた。遠くの方で女たちの悲鳴と何かが壊れるような音がする。カイは狭い通路を駆け抜けながら、本能的に腰の小剣をまさぐった。

まさか敵襲では？ ばかな。このレイヴァン城を他部族が攻めてくるはずがな

い。でも、もしかして……カイの脳裏をいやな予感が走る。

煙はますます濃さを増し、人々の騒ぐ声が徐々に大きくなる。

ばあんっ！

カイは小姓や女中達の間へ通じる扉を蹴り飛ばした。とたんに木片と共に火の粉や灼けた空気があふれ出し、カイを包み込んだ。小姓や女中達が一斉に駆け出して来る。

「みんな、無事かっ！」カイは叫んだ。

永きにわたった平和になれすぎた人々は突然の異変に対してあまりに無力だった。パニックに陥った人々は雑多な群れに過ぎない。

王子カイとて例外ではない。煙と炎の中でカイは辛うじて平静を保った。しかし、まといつくような身体の震えは抑えようがない。カイは用心しいい部屋の中へ入った。

ズガッ！

一瞬の後カイの右腕をかすって小剣がすすだらけの床に突き刺さった。

柄の模様に見覚えがある。トーラスのナイフじゃないか！

「ほおお俺の投げナエーイフから逃れやーるとは……いいェ動きだ」

ひどい訛りのある野太い声が煙の向こうから響いた。

「だ、誰だ貴様っ！」

カイは知らず知らずのうちに腰の小剣を引き抜いた。刃渡り三公石(ボールダー) (約四十二センチ)。代々王族に伝わる宝刀で刃の真ん中から先が二つに分かれている。刃先の溝で相手の刃をとり、たたき折るようになっている。

「ふん、度胸も一人前ぢゃねェアか」

今度は裏返った早口な訛りだった。

二人いる……？ いや、もっといると考えたほうがいいのか。

カイの身体の震えはおさまらなかった。生まれて初めて死の恐怖を覚えた。

さっきのナイフだって自らかわしたのではない。床の置物に足を引っかけたので、ナイフがかすったに過ぎない。しかし、カイはともすればひっくり返りそうな声を抑えて叫んだ。

「わッ、我こそは火を賜りし鳥族(レイヴァン)の正統なる王子、カリエリオ・レイヴァン。お前たちは何者だ？」

煙の中から二人の男がゆらりと現れた。

一人は上半身裸で剛毛に覆われた熊のような奴。大柄で竜の兜をかぶっている。

「ほう……お前がカリエリオ王子か。俺はにァ竜に預かりし獣族(ビースト)の戦士、グラン」

もう一人は黒光りする甲冑(かっちゅう)に身を包んだ小柄な男。

「へっへっへ、光栄でァすぜ王子様。土を知らされし虫族(インセクト)、ビビットっす」

すると獣族と虫族が襲撃してきたのか。一体何人？ まさかたった二人ではあるまい。しかし、他に姿は見えない。

カイは二人に向けて小剣を構えた。刃先が小刻みに震える。  
 グランとビビットはにたにた笑いながらカイに近づいてくる。  
 ビビットが六ボールダーはあろうかという腰の太刀をすらりと抜いた。  
 カイは声を振り絞った。

「貴様らッ、トーラスをどうしたっ！」

二人は明らかにトーラスの小部屋の方から出てきた。と言うことは……。

「そんな名前の奴ア知らねェアが、あっちの部屋にいたガキにアら、今頃お天道様の上だぜ」

「こッ、殺したのか！」

カイはむらむらと怒りがこみ上げてきた。幼なじみの、乳母子のトーラスが殺された。その怒りは恐怖という感情を振り払い、カイを火の玉にした。

「貴様らっ。トーラスをっ、トーラスをっっ…！！！」

カイは手にした小剣を振りかぶりビビットへ斬りかかった。

走り始めて斬り終わるまでの時間は存在したのだろうか。気付くとカイの剣は太刀を持ったビビットの右手首を斬り落とし、その腹部をないでいた。

あまりに速く綺麗に斬ると、切り口の細胞は斬られたことに気付かないという。

相手は痛みを感じない。己の血を見て初めて斬られたことに気付くのだ。

グランがビビットを見て叫んだ。

「ビッ…ビビットッ、おめえ手…手がア…っ」

「は…は、はあああああっっ！ 俺の、俺の手があああっ！！」

六ボールダーの太刀を持つ自分がひ弱な小僧の小剣に負けるわけがない。そんな油断があったのかもしれない。ビビットにとってカイの動きは想像を超えていた。

カイにしても何が何だか訳がわからなかった。なぜ自分に機敏な動きができたのか。しかし、カイは更にビビットの左肩から胸にかけて斬りかかり、とどめを刺した。それが宝剣の威力か。甲冑はまるで紙のように切り裂かれた。

どうっ！

横にいるグランはあまりに速いカイの動きをただ見ているしかなかった。

こんなはずではなかった。鳥族は平和で戦いというものを知らないと聞いた。そこをについて攻撃すれば、簡単に片づけて奴隷にできると思ったのに。

階下の門番や衛兵達はあっけなくやつつけた。それがこのざまは何だ。二十人の兵と戦っても互角な力を持つ、しかも選りすぐった部隊の隊長であるビビットがこうも簡単にガキにやられるとは。

しかし、グランたちこそ侮っていたのだ。元々鳥族は五部族の頂点に立っていた。しかもカイは王家の嗣子。その秘められた能力が一度(ひとたび)開花すれば、その力は大の男に勝るとも劣らない、それほど強いものだ。だが、カイはまだ自分の力を知らなかった。

グランは腰の竜刀（これは二本の太刀を合体したような刀、刃渡り八ボールダーはある）を引き抜いた。ぎらぎら光るその目はもう子ども相手のものではなか

った。

カイはひるんだ。そのとき部屋の外から近衛兵達がどっと入ってきてカイとグランの間に入った。

「王子様、逃げて下さい！」

一人の近衛兵がそう叫ぶと太刀を振りかざしてグランに突進した。続いて二人目も。だが、二人はあっという間に返り討ちにあった。

グランは二股の竜刀で太刀を受け止めると、そのまま刃を兵の胸に突き刺す。刀を力任せにねじ込むといった感じだ。近衛兵は苦悶の表情を見せて倒れた。

その闘いぶりを見て他の近衛兵達はじりじり後ずさりしてグランを遠巻きにした。グランは竜刀をだらりと下げ、ゆっくり移動する。

「王子、私たちが防ぎます。早く行って下さい」

カイはその言葉に従った。廊下に飛び出したとき、グランの「逃げるか、小僧！」の声と近衛兵達の絶叫が聞こえてきた。

中立国の悲しさ、近衛兵にしても実戦の経験はなく、武術はもはや形だけでしかなかった。

カイは一心に階段を駆け下りた。自分には任務がある。まだ死ぬわけにはいかない。そう呟きながら。しかし、それはトーラスや仲間の近衛兵まで殺されながら、グランに立ち向かわない口実のような気もした。

カイは飛翼機が納められた倉庫を目指しながら悔し涙を流した。

「何てこった。飛翼機が……」

一階の駐機庫も悲惨な状況だ。衛兵が三人倒れていた。全部で五機の飛翼機。それはことごとくつぶされていた。

どうやらグランとビビットは飛翼機が鳥族最大の武器ということを知っていたようだ。それで襲撃したとき最初に飛翼機を破壊したのだろう。

それを見てカイは初めてパニックに陥った。ひ弱な自分にグランは倒せない。飛翼機がなければ与えられた任務をこなせるはずがない。もうだめだ。

カイは城の外に飛び出した。グランが今にも自分を追いかけてくるような気がした。カイは逃げるように走った。ただひたすら走った。

### 3

それから二ヶ月の月日が流れた。

カイは寂れた町の酒場「ティコ」で一人酔いつぶれていた。カウンターの奥の薄暗い席で顔を伏せて眠っている。

酒場のおやじがカイを揺り起こす。顔を上げたカイはとろんとした目でマスターを見た。頬の辺りがどこことなく薄汚れている。

「うん？ なーにー？」

「そろそろ看板ですぜカイさん。もう帰っておくんなせえ。ここんとかピーチフローラさんの姿を見かけねやけど、いってアどーしたんですが？」



「うん……すまない。帰る……けど、もう一杯だけ」

「ったくもう、ホントにこれで最後でヤすぜ。あの黄金像の預かり賃だってそろそろ底をつきかけてみゃすし、新たに飲み代入れてもらわなきゃ、やっていけませんぜ……」

ぶつぶつ言いながらもおやじはグラスに酒を注いだ。カイはグラスに口をつけ、酒を含む。喉が熱い。帰ると言っても当てはない。今夜も野宿だ。

カイはぼんやりとグラスの酒を見つめながら、この二ヶ月のことを思い起こしていた。

城を襲ったグラン達は結局数十人の衛兵や近衛兵を殺し、飛翼機を破壊して引き上げた。長老カイエスは助かったということだ。カイは酒場にやって来た人々の話でそれらのことを知った。

カイの方は数日をかけてこのアウトローの宿場町まで逃げて来た。そして、酒場「ティコ」に落ち着いた。

初めて飲む強い酒は腹の中をたぎらせた。それ以上に戦いの場から逃げ出した自分の不甲斐なさに、怒りと情けなさがこみあげていた。幼なじみのトールス、仲の良かった近衛兵達もグランに斬り殺された。それなのに自分は任務を口実に逃げ出した。

飛翼機もなくなった今、自分は使者の資格さえない。臆病者だ——と、カイは自らを罵り、震えながら酒をぐい飲みした。

祖父の言った家族のことも思い出していた。父と母、兄と妹。なぜ自分だけ城に残されたのか。なぜ彼らは城を出たのか。今どこにいるのか。城に戻れず、どこにも行けない。自分は一人ぼっちだ、とカイは感じた。

そんなカイに目を留め近づいてきたのが女給のピーチフローラだった。

カイは甘く匂うような香りを嗅いだ。レイヴァンの女達とは全く違う匂い。カイの隣に座ったのは大柄で髪をアップにした女。白い手には真っ赤なマニキュア、紫紺のドレスをまとい、背中と豊かな胸元を大きく開けている。それがピーチフローラだった。

「どーなさったの、カイ王子様。随分お悩みのようね」

ねっとりした口調でピーチフローラは言った。きれいな標準語だった。

カイは驚き、ぼんやりとした目で彼女を見やった。

「あなたは？ なぜぼくの名を……」

「そりゃあ有名ですもの。レイヴァン城のカイ王子を知らぬ女など、この宿場でないことよ。いたとしたら、もぐりですわ。ほら、あそこの肖像画。カイ王子その人ではございませんか」

カイは壁の絵を見た。それは一年ほど前に描かれた自分の姿である。増刷され配られたのか。それにしてもレイヴァンの町から遠く離れたこんな宿場町で、自分の肖像画が飾られているとは夢にも思わなかった。しかし、もう……。

カイは言った。

「そうですか。いえ、今となっては私は王子ではありません。私は先日レイヴァ

ン城を捨てたのです。逃げ出したのです」

そうして、またぐびっと酒をあおった。ピーチフローラはにこりとほほえんだ。  
「そうでございますか。なら、カイ様。いいえカイ。普通の男となったのですから、私とお付き合い願えないでしょうか」

そう言ってピーチフローラはカイ王子の頬に指を触れた。  
「カイ……貴方は美しい。その華奢な身体、色白の肌、美しい黒髪、瑠璃色の瞳…」

ピーチフローラの吐息が熱い。カイの目は胸の谷間に行った。

「お前は…いったい…」

「フローラよ。そう呼んで。カイ様」

「あ……………」

「無口なのね、カイって。そういうところも…素敵よ……………」

ドガッ！ バリバリッ！

「カイッ！ カイは、いるか！」

カイの回想を蹴散らすかのように、上半身裸の男が一人、店のドアを蹴破り大声を上げて酒場に入ってきた。

剛毛を帯びた胸、竜の兜にひげ面。右手に長い二股の竜刀を下げている。

それを見た酒場のおやじは真っ先に店から逃げ出した。

そうだ、この男、レイヴァン城を襲撃したビーストウォーズのグランだ。

カイはカウンターを離れ、ふらふらと酒場の真ん中に出た。何度となく悪夢にうなされたグランの悪人面。忘れようと忘れられない。やはりやって来たか。

「へっへっへ。なんだカイ！ ガキのくせに酔っぱらっていやアがんのか？！  
まあいい。こちとらビビットの仇をとりに来たでアけだ！ さあ抜けっ！」

竜刀をぶるんぶるんと振り回しながら、グランはカイに近づいた。カイに戦う気など起きない。ここで死ぬなら死んでもいいと思った。

「さあ、仲間のトールスでアか、コーラスでアかの元に逝きな！！」

グランが竜刀を両手で持ち、大きく振りかぶった。カイは目をつぶった。

その瞬間グランはぐらりと揺れ、振り向きながら呟いた。

「んな……ば……か……あ あ」ドチャッ

殺(や)られたのはもちろんカイではない。グランの背中にナイフが刺さっている。裸が運の尽きだったようだ。ナイフの柄に鳥の模様がかった。

「間一髪だった。すまない。ちょっと小便に行ってたもんで……」

「……………」

奇妙な言葉。だが、どこかで聞いたような懐かしい声。

カイは目を開け顔を上げた。酒場の入り口に男が一人立っていた。

そいつは一ト月ほど前やって来て酒場の外で物もらいをしていた乞食だ。よれよれの胴着、ぼうぼうの髪が顔を覆っている。一体……？

するとその男は胴着を脱ぎ、鳥の巣のような髪を取り払った。それはカツラだった。胴着の下には懐かしいレイヴァン城の狩猟服が現れた。

カイはその顔を見て叫んだ。

「トーラス…トーラスじゃないか！」

カイはやっとその男がわかった。安酒の酔いがすっ飛んだ。

トーラスは生きていた。いや、正確に言うと生き返った。あのときトーラスはグランに右腕をちぎられ、下半身と首を切断された。もちろん本来なら死んでしまっただけで生き返ることなどない。だが、トーラスはスター・トゥルースが建造された超科学時代、人工的に造られたヒューマノイド型生命体の血を引く者だった。

それは古代超科学文明の最高傑作、自己再生・自己修復可能な細胞組織をもつ生命体だったのだ。そして、トーラス一家こそ宇宙船に乗った人々が数十年、数百年に渡って眠りにつく間、スター・トゥルースを維持管理する役目を担う家系だった。

もちろんカイがそんなことを知るはずもない。ただカイはトーラスが無事だったことを喜び、涙をあふれさせた。

「トーラス……生きてたんだな！ トーラス……トーラス！」

カイは大粒の涙を流しながらトーラスに抱きついた。

「なんだい、一国の王子がおいおい泣きやがって！ しっかりしろイ！」

そう言いながらトーラスの目にも涙が溢れていた。

「トーラス一緒に来てくれるよね？ 一緒に世界救ってくれるよね？」

カイが言うと、トーラスは笑った。

「なんだあ世界救うって？ ふっ、テメーみたいな奴についてく気はねーけど、カイエス様に頼まれたし、オメーは一国の王子だしな。しょうがねーついてってやるよ」

「でも、なんで？ 何でお前はこんな絶体絶命の時にジャストタイミングでやって来たの？ それにその乞食の格好……」

「そうか、お前は一ト月前からここに来ていたんだ。そして、私を見守ってくれてたんだね。ひどいな一何で言ってくれなかったんだよ。私はお前が死んだと思って猛烈に悲しんだんだぞ」

「すまない。敵を欺くには味方からって言うじゃないか。実はグランが王子を狙っていることはわかっていたんだ。で、奴はいずれ王子の居場所を嗅ぎつけて殺しにやって来る。だからおれは乞食の格好をして待っていたんだ。あいつは衛兵達の仇でもあるしな。それにしてもグランはさすが獣の一族。気配もなくやって来たんで危なかった。おちおち小便にも行けやしねー」

「何いいお前トイレに行ってたの？ このやろ、このやろ。私をチョー危険な目にあわせやがって」

カイは泣き笑いをしながらトーラスの頭をぽかぽか殴った。トーラスはされるがままだった。

「トーラス、ところでお金持ってる？ 実はゴールドバードさー、ここのおやじに酒代で取られちゃったんだ」

「何だってー！ オメーって奴はよくそれで王子だなんて言えんなー。フローラとはいちゃいちゃしてやがったし。ったく、なんて奴だ。ま、そんなこともある

うかと、カイエス様からたっぷり軍資金を預かってきた。これで酒代とそれから  
 駆竜も買い込んで行こう。飛翼機がないからな」

「やったー。何しろほとんど無一文で城を逃げ出ただけに、金目のもの何もな  
 かったんだよね。それにフローラはもういないよ。私が薄汚れてきたら、あっさ  
 り捨てられちゃった。ま、そんな女だったんだな」

その後カイとトーラスは酒場のおやじに金を払い、ゴールドボードを取り戻し  
 た。そして、食料を買い込み、駆竜に乗って宿場町を出発した。二人の冒険はや  
 っと始まったばかりだ。

## 4

カイとトーラスはまず水を司る種族が住むという西の湿地帯に足を延ばした。  
 ビースト族とインセクト族は敵であることがわかったからだ。道すがらカイはト  
 ーラスにカイエスから聞いた一部始終を話した。トーラスは笑いながらも信じて  
 くれた。

(余談だがピーチフローラのこと詳しく話したらしい。二人はいつか一緒にフ  
 ローラを殺そうと堅く誓い合ったそーだ)

二人は二日がかりで荒れ地を突っ切り、水の領域へと足を踏み入れた。

ところが……そこに水の流れはなかった。

「ここが……水の領域？」

カイがつぶやいた。湿地帯が開けるはずなのに、草や樹木が全て枯れ果て大地  
 はひび割れていた。ところどころに川の痕跡があった。

「本当にこんなところに住んでんのか？ 水の種族が」

「地図では確かにここなんだけど…」

カイはずた袋から地図を取り出し、確かめようとした。そのとたん突風がカイ  
 の手から地図をもぎ取る。しかし、さらに驚くべきことがカイとトーラスの目の  
 前に形となって現れた。

「よう、お二人さん。水の領域に何の用だい？」

その声とともに、小高い丘の向こうから鋭いカーブを描いて何かが飛び立った。  
 何とカイの飛翼機だ。いや、少し形が違う。

だが、王家以外の者で飛翼機に乗れる者がいるのだろうか。

飛翼機の間人はゴーグル付きのフードをかぶっている。先の声からすると女の  
 ようだ。彼女は巧みに飛翼機を操り、カイたちの前にふわりと着陸させた。申し  
 分のない操縦だ。

「君は誰だ！」カイは言った。

女はゴーグル付きのフードを脱いで不適な笑みを浮かべた。

まだ少女といった感じか。体の線が目立つ衣装のため大人びて見えるが、十三、  
 四歳くらいだろう。色白で短く刈った黒髪が瞳の意志の強さを際立たせている。

「お前らこそ何者だ！ 私は水の住人。侵入者よ、先に名乗るのが礼儀ではない

のか？」

少女の声は力強い響きを持っている。トーラスがその迫力に負けて少し後ずさった。

カイは一步進み出ると、りんとした声で言った。

「私は火を司るレイヴァンの王子、カイェリオ！ 長老カイエスの神託により、この地を訪れた」

そして、ゴールドバードを取り出して示した。

「ほう。それはゴールドバード……いいだろう。私は水を司るシーマンの王女、エアリア。炎の王子よ、兄王のもとへお連れしよう」

言うが早いか、エアリアは飛翼機に飛び乗って浮かび上がらせた。

カイとトーラスは風圧で飛ばされそうになりながら彼女を見上げる。

「つかまれ！ 供の者もだ。二人くらいならこの鳥で運べよう！」

「待て。我らは駆竜がなくては困る」

カイが叫んだ。エアリアはホバーリングしながら声を張り上げる。

「大丈夫。必要なら我らが世話しよう」

二人は飛翼機の着地用の足につかまった。

「飛翼機、こんな風に乗るなんて……」とトーラス。

エアリアが操縦する飛翼機はぐらつきながらも空高く飛び上がる。そして、かつて湿地帯だった大地を飛んで行った。

三つ目の丘を越えると、ようやく青い水と緑が見え始めた。そこは巨大な湖だった。いや、かつては巨大な湖だったろう。今水面は数ハーンは下がり、土色の岸は崖のようになっていた。その中心近くの小島に白く光る建物が見えた。

周辺の水面には家の形をした小舟がたくさん浮かんでいる。魚を獲っている人や水遊びをする子どもたちの姿も見えた。

エアリアが叫ぶ。

「あれが我らの都レクタポリスだ！ 降りろぞ！」

「へ？ 降りろって俺たちはどーすんだよ！」

「飛び降りろ！」

「うそだろ〜！」

トーラスの叫びをよそに、飛翼機はレクタポリスに向かって急降下していった。

「兄者！」

冠をかぶった若い男が広場にいた。鮮やかな青いマントをまとっている。側に数名の衛兵。飛翼機から下りると、エアリアはその男のもとへ駆けていった。

「お帰り。エアリア」

男は彼女を抱きしめ、それからカイたちに近づいてきた。

「わたしはシーマンの王、カイレイア。そなたらは？ エアリアが伴ってきたところを見ると、客人のようだが」

エアリアが王に耳打ちしている。不思議なことに口は動いているのに、声がちっとも聞こえて来ない。どうやらカイ達の事を伝えているらしい。やがて王とエアリアはこちらに向き直った。

「俺達は長老カイエスの……」

トーラスが早口に事態を説明しようとした。しかし、それを遮ってエアリアが口を開く。

「説明は不要だ。私達水の一族はある程度人の心が読める」

さらにカイレイアが言った。

「そちらの事情は分かった。我らとしても種の存亡がかかる重大な問題だ。ここ一年ほどで湿地帯がなくなり、湖の水が涸れ始めたのも不吉な前兆と感じていた。それに最近獣族と虫族に不穏な動きがあった。そなたらを信用しよう。いずれ我らもこの地を離れ、レイヴァンの地に向かう。さあこれを持って行くが良い」

王は自分のマントに縫いつけてあったゴールドバードを取り出し、カイに渡そうとした。

「あっ！」

カイレイアがゴールドバードを取り落とした。それは王の手からスルリと滑り落ち、粉々に砕けてしまった。

トーラスは今にも王を殺さんばかりの勢いで王の胸ぐらを掴んだ。

右手にはグランを殺したあのナイフが光っている。

「待て、トーラス！ 黄金が砕けるわけがない」

カイが叫んだ。手に一枚の紙片が握られていた。

-----  
お前らには黄金の鳥象(金メッキ)がお似合いだぜ  
-----

紙片には下手くそな字でそう書かれていた。

「像の中に入っていたんだ。くそ！ 誰かが俺達の邪魔をしている！」

「そ、そんな……」

一同の顔が青くなった。しかし、カイだけは冷静さを失わなかった。

カイはしばらく何かを考え、満面の笑みを浮かべた。その様子に気が付いたトーラスが怪訝な顔を見せる。

「何笑ってんだ？ この非常時に」

そう言ってカイに掴みかかろうとしたが、なんとか理性で自分を押さえた。

そして、やさしく「何考えてたの？」と聞いた。

「あ、ああ。いいことを思いついたんだ。水族のゴールドバードは何者かに盗まれた。そうすると他の部族のゴールドバードも盗まれたと考えた方がいい。だから、いちいち他の部族をまわって集めなくていいんだよ」

それを聞いたトーラスは目をランランと輝かせた。

「そっか。盗んだ奴が他のゴールドバードを全て持っているわけだから、そいつの所に行けばいいってことか！ で？ その盗んだ奴って誰なんだ？」

トーラスは嬉しそうに聞いた。めんどくさがり屋の彼にとってはとても画期的なことだ。

「盗んだ奴かア……わかんない！」

カイが頭をかきながら答えると、トーラスはカイの胸ぐらを掴んだ。  
 「そーいう肝心なこと先に考えてくれないかなー？ カイク〜ん！」  
 とやさし〜く言った。

しばらく沈黙が続いた。沈黙を破ったのは水族の王カイレイアだった。  
 「おそらくこの像を盗んだのは……獣族虫族を宰領する雷族でしょう。このところ奴らがこの辺りを徘徊しているという報告もありました。あるいは、そこに四体が集まっているかもしれない……」

「じゃあ、さっさと行こうぜ！ 雷族は南の方だ」

カイレイアが話し終えぬうちにトーラスが言い、カイもまた「そうだな」といった感じで頷いた。そして、二人は水族の王と王女に深々と礼をし、すたすた歩いて城を出ていってしまった。

「……兄者、あの者達はどうやってここを出るのでしょうか？」とエアリア。

「いや、私が船のことなど話そうとしたのに彼らは行ってしまった」

王とエアリアは呆れたように笑った。

カイとトーラスは勢いよく城を飛び出したのはいいが、地図をなくして雷族のいる場所はわからない。それに駆竜をもらい忘れた。なおかつ、いるのは湖の中。

水辺まで来て、やっとそのことに気付いたカイとトーラス。

「バッカじゃねえの、お前！ どうやって向こう岸に渡るんだ。アホ」とトーラス。

「お前が『さっさと行こうぜ！』って急がせたんだろ。うっかりしてた私も悪いけどお前だって悪い！」と負けずに言い返すカイ。

「っんだと〜」

「なんだよっ！」

二人は子どもっぽく取っ組み合いの喧嘩を始めた。…ったく。

「お〜い。カイ王子〜！ トーラスー！」

そのとき少女の声が空から降ってきた。二人が空を見上げると、エアリアが飛翼機で近づく。そして、いきなり二人の頭上に急降下した。

「つぶねーなー！ おまえはア！」とトーラスがどなる。エアリアは素っ気なく無視。

「全くあんた達ったら！ 雷族の住処は聞かない。駆竜や船のことも忘れて一体どうやって行くつもりだったのよ？ せっかく人が親切に教えてやろうと飛んで来たのに。何よ、その言いぐさは！」

「ごっこめんなさ〜い！ エアリア様〜」

急に猫なで声になるトーラス。エアリアは「ふんっ！」と鼻で笑った。

「雷族はね、南の方をずっとまっすぐ行って。そうすると大きな山があるの。その山全体が奴らの住処よ。そこはね年中雷が鳴って雨風のひどい所だから、感電しないように注意して。これは母から授かった不思議のローブ。これを着れば大丈夫だから」

エアリアは二人に妙に固くて柔らかいローブを手渡した。毛皮のような手触り

なのに、金属質の光沢があった。

「本当にありがとう」とカイ。

「ヘッヘッ、サンキュー」とトーラス。

「それからこれ。駆竜なんかじゃ間に合わないから、この飛翼機に乗って行って。もう時間がないんじゃない？ 二人でも何とか乗れると思う」

「いいのか？」とトーラスが聞く。

「うん、がんばって。雷族の説得に成功してね」

カイは力強く頷き、トーラスは笑みを浮かべた。

「あんがと。もう俺エアリア様の大ファンになっちゃう！」

「何言ってるのよ。さっ！ 早く行った行った！」

エアリアは爽やかに笑った。

「いろいろありがとう。きっと血を流さずに雷族を説得してみせる。さあ行くぞ！

トーラス」

カイとトーラスは前後ろになって飛翼機に跨（またが）った。飛翼機はぐらぐら揺れながらも浮き上がり、やがて大飛竜のようにゆるやかに空を舞い始めた。

「よっしゃーオッケーだ。良い報告待ってろよー」とトーラス。

「いってきます」とカイ。

「いってらっしゃーい」

エアリアが大きく手を振った。飛翼機は猛スピードで南に向かった。

目指す南の空にはどす黒い雲の塊が広がっていた。

## 5

黒雲に近づきながらカイは思った。鳥族の地を離れて早数ヶ月。途中妙な年増女に引っかかって大切な時間を無駄に使ってしまった。アトラン島の全住民を救うという重圧に耐えきれず、甘く匂うような色香に溺れた。逃避だったのかもしれない。

最近地上では月が二つになったと人々に不思議がられていた。確かに夜ぼっかり浮かぶ月のそばに、一回り小さい月が出現していた。最初一つの星に見えたそれは徐々に徐々に拡大していた。急がなければならない。カイは身の震えを覚えた。

二人の乗った飛翼機は次第に雷雲に近づく。すると風が激しく吹き始めた。

カイとトーラスはぶ厚い雲に突入した。猛烈な雨が降ってきた。

バリバリ、ピカッ ドッシャーン！ ピカッ バリバリ！

一帯は正に雷の巣窟のような荒れ具合である。

「おい、カイ。これあやばいぜ」トーラスが声を張り上げる。

「そうだな。降りて歩こう」

二人は山の麓に小さく広がる森に向かって下降し、草原の中の岩陰に着陸した。そこへ飛翼機を隠すと、ロープをはおって歩き始めた。



ローブの効き目は絶大で、彼ら二人のぐるりは晴れ上がり、上空に青空まで見えた。

「エアリアさんのローブはすぐれもんだな。しかし、カイ、こんなに堂々と歩いて大丈夫なのか。しかも俺たちの周り、雨さえ降ってねえぜ」

「うん、むしろそれがねらいだ。きっと雷族が我々を捕まえようとやって来るさ。もう時間がない。ここはすんなり捕まってあとは当たってだけでいい」

「そうか、そう言やそうだな。お前段々王家の跡継ぎに相応しい頭を持つようになったなあ。俺なんか思いつきもしないぜ」

「あの女と付き合っただけで落ちてぼいと捨てられた。そうしたら、すうっと頭の中が晴れ渡ったようになったんだ。何だか自分のやることが見つかったような、そんな気になった。そういう意味じゃ彼女に感謝すべきかも」

「ふうん、そうか。やっぱり王家の血筋なんだろうなあ。あの女いつか殺してやるとか言ってたおまえが。ところで、あのエアリア姫、うなじがとっても色っぽかったけど、そこに鳥の形のあざがあったぜ。何だかお前の首のあざと似ていたなあ」

カイは黙って首筋を押さえた。それはカイも気づいていた。カイに妹がいることはまだトラスに話していない。エアリアが飛翼機を操ることといい、あるいは妹なのかもしれない。カイはそんなことを考えた。

エアリアはカイレイアを「兄者」と呼んでいた。ならば、カイにとっても兄と言うことになる。だが、彼の首にあざはなく、自分やエアリアに似ていない。それにレクタポリスにいたとき、エアリアの母も父も登場しなかった。カイはそれを聞いていいかどうかわからず黙っていたのだ。

そこへ予感通りひげもじゃで原始的顔立ちの雷族の見張りが驚嘆の顔で現れた。二人は武器を差し出して投降した。雷がピシャーンと鳴った。

連れて行かれたのは巨大な洞窟の中だ。広場のような所に高さ三ハーン（三メートル）ほどの祭壇があった。そこには思った通り四体のゴールドバードが祀られていた。祭壇の前に二人の一倍半はありそうな巨人たちが数十人立っていた。みな褐色の肌だ。

広場の中心には広さ十ハーンほどの穴が開いている。そして、そこに人が一人通れそうなほどの木の橋が架けられていた。周囲の小さな洞窟が彼らの住居のようだ。

「頭領、こいつらこんなものを持ってました」

見張りが中央の一際背の高い雷族の男にカイらの武器とゴールドバードを手渡した。男の頭はもじゃもじゃ、褐色の肌でごわごわの髭を生やしている。ライオン丸のようなこの若者が雷族の長らしい。

「ふん、飛んで火に入る何とやらだな。五つ目のゴールドバードが勞せずして手に入ったわい。皆の者！ これで我ら雷族がアトランの支配者なるぞ」

周囲の男たちからどっと喊声がわき起こった。

「エルゲイド様万歳！」

「エルゲイド様バンザーイ！」

小さな洞窟から薄汚れた女や子供たちがそろそろと顔をのぞかせる。

カイは子供たちを見回し、振り返って雷族の長に言った。

「エルゲイド。雷族を治(し)らしむる長に頼みがある。君に民を思う心、あの子供たちを思う心があるなら、五体のゴールドバードを私に預け、直ちに全住民を引き連れて鳥族の聖地まで来てほしいのだ」

「にヤァにい？」

「今、アトランの地は滅亡の危機に瀕している。空の月が二つになったことは知っているな。それは巨大な隕石なんだ。最初小さな星に見えたそれは今どんどん大きくなっている。やがてそれはこの星に衝突する。隕石は極南にぶつかり、サウス氷河を破壊する。溶けた水が地上を覆って海面は百ハーン上昇する。我らがアトランの地は海の底に沈んでしまうのだ。われら五部族は全て滅ぶ。今は争っている時ではない。エルゲイド。頼む、わかってくれ」

カイの真剣な眼差しはエルゲイドの心に達したかどうか。

確かに最近月が二つになり、祈祷師が将来の不吉を予言していた。雷雨も以前になく激しさを増し、民に不安感が流れていた。しかし――、

「なるほど。神を司(つかさど)る鳥族の使者が言う事だ。あるいはそうかも知れぬ。だが、このアトランの地全てが海の底に沈むとしたら、どこに行っても助からぬではないか。我が部族が聖地に行ったとして、どうやってわれらは救われるのだ」

カイは迷った。しかし、全てをうち明けねば、信じてもらえないだろうと思った。

「それは……スター・トゥルース、つまり星々の間を飛ぶ乗り物を使ってこの星から脱出するのだ。五体のゴールドバードはスター・トゥルースを操縦する鍵なのだ」

「カイ……」 トーラスが心配そうに声をかけた。

「ほう。それではそのスター・トゥルースやら言う船は何人乗りなんだ。いや、一部族一万人として五部族五万人、全員乗れるのか。それに食糧はどうする。5万人もの人間がその中で生きていけるのか」

カイは答えに詰まった。祖父に乗船定員を聞き損ねたからだ。

「たぶん……いや、きっと五部族全員が乗れると思う。そうでなければ、祖父がこんなことを言うはずがない」 カイの声は弱々しかった。

「ふん、やっぱり信用できないな。者ども、こいつらをその穴に放り込め。下の恐獣が食い殺してくれるわい」

「待て、待ってくれ！」

再びどっと関(とき)の声が上がり、カイの声はかき消された。

カイとトーラスは縛り上げられ、大穴の上の一本橋まで連れて行かれた。眼下には鋭い牙の恐獣が舌なめずりしながら上を見上げている。

そのとき、りんとした女性の声が洞窟内に響きわたった。

「待ちなさい！」と声は言った。

その人はきらびやかな絹で飾られた小洞窟から出てきた。すらりとした美しい

人だ。他の女たちと比べて気品がある。肌の白さからすると雷族ではない。

「母上」エルゲイドが言った。他の男たちは皆その場にひれ伏した。

カイとトーラスはあっけにとられた。

彼女はしずしずと近づいて来る。エルゲイドのそばに立つと、半分の大きさもない。

「カイ、大きくなりましたね」女性は優しく微笑みながら言った。

カイとエルゲイドは同時に驚きの表情を浮かべた。

「まさか！」二人は同時に叫んだ。

「あなたは……母上？」とカイ。

「では、こいつは俺の弟？」これはエルゲイド。

トーラスが「ウッソー！」とすっとんきょうな声を上げた。

「全然似てねえじゃん……」

「お前たち、早く二人を縛(いまし)めから解いてあげなさい」

カイの母、アリアドネの命令は絶対だった。カイは初めて優しい母の懷に抱かれた。カイの目から一粒涙がこぼれた。

カイの兄、エルゲイドはもじゃもじゃ頭をぼりぼり搔いていた。

「じゃあ俺は弟を殺しかけたのか」とつぶやいた。

「まったくもうホント、危ねえところだったんですぜ」とトーラス。

カイは落ち着くと、母に尋ねた。

「では、わたしの父上は雷族なのですか。そして、父上は？」

アリアドネは穏やかに答えた。

「そうです。そなたの父は雷族の長の息子エルゲウス。雷族に名だたる勇者でした。わたしはあることをきっかけに彼と愛し合い、結ばれ、エルゲイドとお前、そしてエアリアを生んだのです。そのローブは私がエアリアに与えたものです」

「やっぱ、エアリアさんはカイの妹だったんだ」とトーラス。

アリアドネは頷くと、なお説明した。

「しかし、お父様は私たちのことを許してくれませんでした。鳥族の娘が雷族の男と結ばれるなど論外だと。見て分かる通りエルゲイドは父親似、お前とエアリアは私の血筋でした。

お父様はお前とエアリアを聖地に残せと言いました。しかし、神の声を伝えるのは男の役目。私はカイをお父様に預け、エアリアとエルゲウスを連れ、引き裂かれる思いで聖地を出たのです。決してあなたを捨てたわけではありません。エアリアは肌が白いので、いどこであるレクタポリスの王妃に預けました」

「そうだったのですか。で、父上は？」

「おまえの父エルゲウスは二年前獣族の男グランに殺されました。卑怯な方法で背後から不意打ちされたのです」

トーラスがカイに囁いた。

「おい、グランて言ったら、あのビーストウォーズのグランのことじゃないのか」

「たぶんそうだ。トーラス、おまえは父の仇を取ってくれたわけだ」とカイ。

「何っ、お前はあの憎たらしいグランをやっつけたって。素晴らしい。君こそ真

の勇者だ」

エルゲウスがトーラスを賞賛した。

「で、武器は？ 剣か？ 素手か？ 真っ正面から戦って倒したんだな？」

トーラスは顔を真っ赤にした。「いや、あの、まあ。そっ、そんなところで……」

「長の仇を取ったトーラス万歳」

「勇者トーラス、バンザーイ！」雷族の人々が叫んだ。

「母上、あなたはご存じですか。スター・トゥルースには一体何人の人間が乗れるのです？ 五部族全員乗れるのでしょうか」

「大丈夫です。あの船は反重力地場を備えた船。船の大きさは百ハーンもありますが、人間は下降の部屋を通るうちに縮小化されるそうです。父からそう聞かされました。あなたは知らなかったのですか」

「いや、あの、その……聞き損ねました」

アリアドネはくすりと笑った。

「お前も兄に、いや父によく似ておっちょこちょいな所がありそうですね」

トーラスが口を挟んだ。

「しかし、獣族や虫族の奴らも連れていくのか？ あいつらものすごく野蛮じゃないか」と口をとがらせた。

アリアドネが言う。

「もちろんです。われらアトランの民は祖をたどれば一つの種族。みな連れていきます。それにスター・トゥルースに乗れば、みな凍ったように眠りにつき、何も食べる必要はありません。操縦は鳥族の者たちだけで行われるのです」

その後は早かった。雷族は大移動を始め、その先頭にエルゲウスの姿があった。きっとエルゲウスが獣族と虫族を説得してくれるだろう。

カイとトーラスは飛翼機に乗って、もちろん五体のゴールドバードをずた袋に入れて飛び立った。空は昼間でも二つの月がくっきり見えていた。

二人は水族の城に立ち寄り、カイはエアリアに兄妹であることを告げ、母と兄ともすぐに会えるとうち明けた。エアリアが喜び、涙を流したのは言うまでもない。

そうして、カイは約一年ぶりに巨大な神の部屋へ入った。既に五部族の民は全員がスター・トゥルースへの乗船を終え、柔らかな各部屋に入ると、くずおれるように眠りについていて、あのピーチフローラの姿もあった。壁から伸びる触手が一人一人を繭のように包み込んだ。

カイは赤く青く明滅する神の前で操縦席の椅子に座った。背後から祖父、母、兄、妹、そして、トーラスに乳母のトロテが見つめる。

カイは少しずつ形の違う五体のゴールドバードを操縦席の穴に一つ一つはめ込んでいった。一つ埋めるごとにブーンとうなるような音が高まる。

「俺たち、このまま立ってて大丈夫なの」とトーラスが誰にともなく聞いた。

長老カイエスが「もちろん。反重力地場に重力は関係ない。神がきちんと調整してくれるはずじゃ。ただ果たして動くかどうか。それが問題じゃ」と答える。

一方、エアリアは母のアリアドネに尋ねていた。  
「アトラン人の祖先はなぜ高度な文明を捨て原始生活からスタートしたのですか」  
アリアドネが答えた。「いまだ人間は野蛮な性質を捨てることができません。そのような人間が高度文明の機器を手にしたら、自ら滅びてしまうからです」と。

カイが五つめのゴールドバードを埋めたとき、うなりの音は最高潮に達した。  
神は激しく点滅を繰り返した。すべるようなかすかな音も聞こえる。  
そして、全ての音がかき消え突然静かになった。ことりとも音がしない。爽やかな風が頭上から吹いてくる。

「やっぱりだめじゃん」

最初に弱々しげな声を上げたのはトーラスだ。トロテも不安げな顔を見せる。  
「数百年も経っていてはもはや船は動かぬか」カイエスがつぶやいた。

誰もが離陸に失敗したと思ったそのとき、右の壁一面が明るく輝き、無数の星々が映し出された。そして、中央には青くみずみずしい惑星が一つ。そばには月がぽっかり浮かんでいる。さらに月の大きさの五分の一程の巨大隕石も見える。

一瞬ぼかんとした後、一同から歓声がわき起こった。

「やった、やった。離陸していたんだ！」

「良かった、良かった。助かった！」

抱き合い、涙を流し、一同は喜びに浸った。

これで当面の危機は回避された。

カイは母や兄と抱き合った後、エアリアのところに行った。  
優しく抱擁すると、カイはエアリアの耳元で囁いた。  
「エアリア。トーラスは君が好きらしいぞ」  
エアリアはうなじを真っ赤に染めて「いじわる」と言った。  
向こうでトーラスはエルゲイドとふざけていた。  
スクリーン上にぽっかり浮かぶ青い惑星は徐々に遠く小さくなる。  
船は一体どこに行くのか。この惑星に再び戻ることはあるのか。  
それは全て明滅する神のご意志である。 (完)